

# 留学生のレジュメ作成スキルにおける変化と課題

— 1年次と3年次の比較を通して—

志 賀 里 美

## Changes and Challenges in Resume Writing Skills of International Students: A Comparison of First-Year and Third-Year Students' Resume Writing Skills

Satomi Shiga

### 要旨

本研究では、1年次および3年次の学部<sup>1</sup>留学生のレジュメ作成能力における変化と課題を明らかにすることを目的とし、3名の留学生を対象にレジュメの比較分析を行った。具体的には、初年度と3年次のレジュメを分析し、言語表現の変化、構成の改善、および参考文献の書き方に見られる成長を検討した。その結果、1年次に比べて3年次のレジュメでは、「です・ます体」の混同がなくなり、視覚的明瞭化や内容の階層化が進むなど、顕著な向上が確認された。一方で、自分の意見と引用部分の区別に関しては、引き続き課題が残っていることも明らかとなった。

また、インタビューやアンケート結果から、留学生たちはレジュメ作成時に日本語表現や構成の難しさを感じている一方で、フィードバックや実践経験がスキル向上に大きく寄与していることが示された。特に、フィードバックを受けることで自信が付き、より効果的なレジュメ作成が可能になったことがわかった。さらに、留学生たちは翻訳機を使用することが多く、親しい日本人学生が少ないことから、日本語のチェックに関する課題も浮き彫りになった。その結果から、レジュメ作成支援として、見本集の提供、日本人学生との交流機会の拡充、学内サポートの周知方法の見直しを提案し、より効果的な学習環境の構築を目指す提案を行った。

キーワード: 留学生、レジュメ作成、レポート作成、日本語教育、リテラシー教育

Key words : International Students, Resume Writing, Report Writing, Japanese Language Education, Literacy Education

## 1. はじめに

本学で1年次に担当した留学生のレジュメを久しぶりに見たところ、よくできており、非常に驚いた。本学の留学生は JLPT が N2 以上の留学生が入学してくるが、入学後にレジュメやレポートを書いてもらおうと、言いたいことが何かを理解できないことも少なくない。しかし、3年次に提出されたレジュメはそのようなことはなく、非常にわかりやすく、見やすいものとなっていた。

そこで、本論文では3名の留学生に協力してもらい、留学生たちのレジュメがどのように変化をし、本学におけるどのような授業を受けたことにより、変化していったのか、また課題などについて、各学年のレポートを分析することに併せ、アンケートやインタビューから明らかにしていきたい。

## 2. 協力者の留学生の日本語能力について

今回の調査では3名の留学生に協力してもらった。国籍や日本語能力については、表1のとおりである。

表1 留学生の属性

留学生	現在の学年	国籍	JLPT
A	3年生	ベトナム	N2
B	3年生	中国	N1
C	3年生	中国	N2

また、今回の調査にあたり、TTBJ<sup>2</sup>も受験してもらった。その結果は表2の通りである。

表2 TTBJの点数

留学生	SPOT 90-1	SPOT 90-2	SPOT 90-3	Grammar 90-1	Grammar 90-2	Grammar 90-3	漢字 SPOT (50問)	合計
A	30	23	15	29	27	19	38	181
B	29	28	26	30	27	24	46	210
C	30	27	21	27	21	15	45	186

### 3. レジメの特徴

3名の留学生が1年次および3年次に作成したレジメを比較し、それぞれの特徴について検討する。

まず、1、2年次のレジメには以下の3つの特徴がみられた。

- ①「です・ます体」の混同
- ②参考文献の書き方に誤りが見られる。
- ③レポートの流れに沿った作成

#### 2.3 お嬢さんへの失恋

- ・お嬢さんは親友である先生と結婚する。
- ・打撃の知らせを冷静に迎えましたが、とてつもない苦痛だった。
- ・先生の裏切りが自殺につながる可能性はゼロです。

#### 読んだ後の感想・気づき

私も日本語学校に通っていたときにこの本を勉強しましたが、中国で勉強した教科書と比べると、むしろネイティブの日本語の会話に重点を置いた本です。少し堅いですが、理解しやすく覚えやすいです。当時私が中国で勉強していた教科書はJLPT試験用に編集されたもので、内容はN1～N5の文法をベースに初級、中級、上級に分かれていました。それでもかなり違うように感じます。

図1 ①「です・ます体」の混同 (上:A 下:C)

図1では、Aは「迎えましたが」複文内の前項部分、「ゼロです。」の文末が「です・ます体」になっている。また、Cのレジメは全て「です・ます体」で書かれており、レジメではなく、レポートのようにになっているもの

もあった。

しかし、2、3年次になると「です・ます体」の混同は全く見られなくなる。

**参考文献**

夏目漱石(2014)「『こころ』をどう読むか」石原千秋(編者)

山口(2017)「男女の賃金格差解消への道筋—統計的差別の経済的不合理の理論的・実証的根拠」日本労働経済研究 50:40-68.

図2 ②参考文献の書式誤り(上:A 下:C)

図2は、AとCの参考文献である。書く順序が異なり、Aは筆者名も間違っている。Cも本文内での著者名の書き方と参考文献の書き方が混在している。しかし、3年次になると、図3のように、間違いは見られなくなる。

**参考文献**

松田真希子(2016)『ベトナム語母語話者のための日本語教育:ベトナム人の日本語学習における困難点改善のための提案』春風社

4. 佐々木 良造、薄井, 良子(2013)「中国語を母語とする日本語学習者の句読点使用に関する研究」『関西学院大学日本語教育センター』, 5-19,

図3 3年次の参考文献の書式(上:A 下:B)

また、1年次であると、図1のC、および、図4のBのように、レジメとレポートの違いがわかっていないケースも見られるが、2年次にはそのようなレジメは見当たらなくなる。

1. 初めに

本稿の目標：関西弁が日本全国で広まっている背景を明らかにする。  
方言や少数文化の保護に役立つ道を光る。

2. 調査過程

調査方法：アンケート

・対象：大阪や近畿地方など関西地方以外の出身の大学生10人。  
質問：「しんどい」と「めっちゃ」という言葉の意味を知っているかどうか  
「日常生活で無意識に使用したことがあるかどうか」

調査結果：「めっちゃ」を使用した人は10人いる。  
“しんどい”を使用した人は6人いる。

3. 関西弁の進出背景への探究

(1) 近代文学領域で関西弁の試し：『近代文学の中の“関西弁”』

大岡昇平の作品『夜明け前』：関西弁を話す登場人物が多く登場し、その話し方や表現が彼らの出身地や背景を強調する役割を果たす。

図4 ③レポートの流れに沿った作成 (B)

ただ、個人差や授業の性質上、レジメを提出せず、レポート形式のものを発表する授業もあるとのことで、Cについては、3年次も長文のものが多く、箇条書きがあまりない場合もあった。

さらに、2年次の後半から3年次になると、以下の3つの変化がみられた。

- ④矢印などの記号使用による視覚的明瞭化
- ⑤段落やスペースを多く取り、内容を階層的に整理できている。
- ⑥重要点の数を明確に示すこと

図5はAの3年次のレジメである。例からわかることを「→」でまとめ、さらに結論を「⇒」でまとめている。また、重要な点には下線が引かれている。

### 3. 漢字の多様な読み方

漢字の読み方：音読みと訓読みの二つがある

- 音読み：中国語の音に基づくもの
- 訓読み：日本語の音に基づくもの

※実際の使用ではこの読み方を守らない例も多く、漢字が組み合わさることで説明できない読み方が生じることもある。

例文：「日」の読み方は、音読みは「ニチ」「ジツ」、訓読みは「ひ」「か」である。

「1月1日は日本の祝日です」

「その日は日曜日で5日ぶりに雨が降りました」

→漢字の読み方は語彙によって異なる

→単に読み方を覚えるだけでなく、どのような状況や語彙でどの読み方を使うかを理解する必要がある。

図5 ④矢印などの記号使用による視覚的明瞭化 (A)

図6のように、Bは2年次より矢印の使用が見られるが、3年次になると、比佐(2015)において「全体としてまとまりのあるレジュメに」するために必要としている「段落化している箇条書き」が見られるようになり、内容を段階的に整理できていることが見て取れる。

### 8. まとめ

●親近性と信頼性は、教育コミュニケーションにおける最も求められる基礎

⇒褒めるや叱るが誠実かつ建設的な方法で理解され評価される

⇒相手の自尊感情を保つ、内発的な動機づけを促し、持続的な学習につなげる

⇒関連性を配慮し、多方面から学習意欲を高めるアプローチすることがヒント

### 1. 日本語教師の「売り手市場」<sup>1)</sup>と若者の日本語教育離れ：

⇒日本語教育の未来：留学生の急増＋法的根拠の基盤の充実

➡思考：「明るい」変化の兆し？

⇒就労状況：給料低水（就労条件の格差）

職場ジェンダー

混在する学生（就労環境の厳しさ）

日本語教師の就労を取り巻く／学歴条件

➡若者の「日本語教育離れ」(図2、図3)



図6 ⑤段落化している箇条書き (上：B 2年次 下：B 3年次)

図7のA、Cのように、重要なタイトルに下線を引く、重要な点は「○」で示すなど、聞き手に対し、重要な点がいくつあるのかを見てすぐわかるように示すようになっている。

以上のように、学年が上がるにつれ、レジメが見やすく、わかりやすくなっていることがわかる。

しかし、課題も残っている。授業で課題図書をまとめ、自分の意見を述べる場合、本文の引用をし、自分の意見を述べることがあるが、どこからどこまでが本のまとめで、どこが自分の意見かがわかりかねるケースがある。

・大学の留学生獲得戦略の変化：

- 各大学の留学生獲得戦略の変化として、「英語シフト」が注目されている。
- 有力大学は国際的なランキングを向上させるために、海外の一流大学からの留学生を増やすことを目指しており、その手段として留学生教育を英語で行う方向にシフトしている。

→ これらの変化に対応しないと専任教員の削減やポストの喪失が起り、日本語教育や日本語の存位が危ぶまれる可能性が高まる。

⇒ 対策として、学習者の動機づけ向上と「英語シフト」の否定が重要で、やさしい日本語を活用した新たな教育手法の開発が求められる。

#### 4. 1 展望

・転籍自由度の向上

外国人労働者はより自由な職場選択が行えるようになり、自身のキャリアやライフスタイルに合わせた選択が可能となる。

・長期的なキャリアパスの提供

外国人労働者に安心感と将来への希望を与えることができる。

企業側も、長期的に働いてくれる技能実習生を育てることで、安定した労働力を確保することが予想される。

図7 ⑥重要点の数を明確に示すこと（上：A 下：C）

図8は3年次のAのレジюмеだが、「⇒」以降が自分の意見ではないようにも読める。

#### 7. おわりに—「やさしい日本語」の可能性<sup>4)</sup>

- ・「やさしい日本語」の可能性は、日本語母語話者にとって「日本語表現の鏡」となることで、自分の意見を伝えて相手に受け入れさせる能力が重要とされる。<sup>4)</sup>
  - ・日本の国語教育ではこの能力を磨く機会が乏しいため、外国人相手の活動を通じて日本語運用能力の向上が求められる。<sup>4)</sup>
- ⇒日本語教師もやさしい日本語の運用能力を磨き、日本語母語話者の意識の変容を促すインセンティブとなる可能性がある。<sup>4)</sup>

図8 ⑦自分の意見と引用の明確化 (A)

以上、1年次から3年次のレジюмеを考察し、6点の変化と残る課題について述べた。では、なぜそのような変化が起こったのであろうか。次章では、その要因について、アンケートやインタビューの結果から明らかにしていきたい。

#### 4. レジюме作成についてのアンケート・インタビュー結果

ここでは、レジюме作成にあたり、困難を感じる部分やどのようなことが能力向上に役立ったのかについて明らかにしていく。

##### 4-1 レジюмеを書く際に感じた困難点について

初めてレジюмеを書いたときの感想を聞いたところ<sup>3)</sup>、3名ともレジюме作成は難しいと感じていて、構成や日本語に問題を感じていることがわかる。

A：日本語で初めてレジюмеを作成したとき、言葉の選び方が特に気になりました。ベトナムと日本でのレジюмеの基本的な書き方はあまり変わらないものの、言葉遣いには大きな違いがあります。ベトナム語では辞書形とます形を区別しませんが、日本のレジюмеでは辞書形を使用する必要があります。

B：最初にレジюмеを作成して始めた時、あまり自信がなくて、アウトラインを考えずに思いついたことをそのまま書いてしまいうことがあって、結果は全体的にまとまりがないと感じてしまいました。



C：初めてレジюмеを作成したときは、日本語があまり上手ではなく、要約するのも苦手だと感じていたので、とても難しく感じました。

次に、現在はどうのような点が難しいか聞いたところ、全員が「日本語表現」と答えており、具体的には、「箇条書きの際に名詞で終わらせるところ」「書きことば専用のことばがあること」「自然な日本語で書くこと」が挙げられた。

B：日本語表現。普段はレジюмеとレポート両方書いているんじゃないですか。レジюмеはポイントだけをまとめるだけなので、ことばを選ぶのが一番難しい。

例えば、〇〇の授業で、社会力を磨くに関する発表のために、わざわざレジюмеかいました。あのころは自信、社会力をあがるために、自信と思いがあがるにかんすることばをさがしていたんだ。日本人が等身大の自分ということばを教えてくださいました。

このように、長い言葉で表現することはできても、それに合う単語を探すのは難しいことがあるという。

以上のことより、レジюме作成の際には、以下の3点に困難を感じていることが明らかになった。

- ・構成
- ・要約
- ・日本語表現

#### 4-2 日本語表現が出てこないときの方略

前節において、レジюме作成の際の困難点として、日本語表現が挙げられたが、そのようなときにはどのようにしているのかについてもインタビューを実施した。その結果、全員、翻訳機を使用しているとのことだった。また、Bは翻訳機と併用して「Google ドキュメントの応答チェック」を使用しているという。この学生は、チャット GPT も時々使用するとのことだったが、日本語のチェックについては「Google ドキュメントの応答チェック」のほうがいいとのことだった。

C：チャット GPT は使わないけれど、翻訳は少し使う。自分が思う話が日本語を書くとき、おかしいかなと思うとき、翻訳機に聞いてみます。一つのレジюмеに5回ぐらい。

A：あまり日本人の友だちがいないから。ちょっと日本語間違っちゃ

ないけど、自然な日本語じゃない、硬い日本語とか不自然な日本語があると思います。翻訳機は使う。Google使っているんだけど、書けない文章とか意味が日本語にかわる、どうかなというときに使っている。レポートだけ使う。レジユメは文章が短いから使わない。

翻訳機の日本語が正しいかどうかの判断については、

A：日本人のレジユメや文章を参考にして判断しています。自分の書いた表現が、実際に使われている表現と比べて違和感がないか、ニュアンスが合っているかを確認することで、改善点を探っています。

という回答の一方で、そこまでは考えていない学生もいた。

また、3名の留学生とも、日本人学生には聞かないとのことだった。上記のBのインタビューの中にもあったが、そのようなことを頼める日本人の友人がいないためどうしても適当な日本語表現が見当たらない場合は、翻訳機を使用していることが明らかになった。

本学には学生たちが自由に質問できるよう学食に「ラーニングコモンズ」<sup>4</sup>という場所を設けている。そこで見てもらうことを提案したところ、3名の学生とも、「知らない先生にレジユメを見せるのは恥ずかしいから」使わないという答えが返ってきた。

以上のことから、日本語表現が出てこないときは、日本人の友人がいないことや、知らない日本人教師に添削を求めるのが恥しいことから、以下の2つの方略を用いていることが判明した。

- ・ 翻訳機の使用
- ・ Google ドキュメントの応答チェックの使用

#### 4-3 作成回数とフィードバックが自信・スキル向上に与える影響

現在までに何回以上レジユメを作成したかを聞いたところ、全員10回以上は作成しているとのことであった。

ある学生は次のように述べていた。

C：3年間でたくさん書いて、回数多くなって、自分の自信もある。初めてレジユメを書いたとき知識がなくて、めちゃ弱い。回数が多くなって、その流れもわかるし、内容もわかるし、自信がある。

少し上手になりますな感じです。

本学は少人数制の大学であり、1年次よりゼミが必修であるため、他大学と比較すると発表回数が多い傾向にあると言えよう。その回数の多さが自信につながっている様子がインタビューからわかる。

また、大学によっては、レポートやレジюмеの書き方を学ぶ授業がない場合もあるという。

B：他の大学の友だちとお互いの課題を見せ合ったら、私のレジюмеの書き方を褒められて、うちの大学ではそんな授業はないんだよと言われました。

普段課題として書いているんだけど、恵泉の学生よりも彼らの課題を見ればわかります。

そこで、他の大学ではレジюмеやレポートを書く回数が少ないのかをきいたところ、そのようなことはないとのことだったので、差が生じた理由について尋ねたところ、「レポートやレジюмеに関する授業の有無とフィードバックが少ないのが原因ではないか」とBは回答した。

1年次と比較して3年次においてレジюме作成能力が向上したかを尋ねたところ、3名全員が「向上したと思う」と回答した。その要因として考えられることとして、「日本語の能力向上」および、「レジюмеの書き方に関する知識の向上」と回答している。

実際のインタビューでも、

A：1年生の留学生のことばでレポートの言葉のリストがあります。その言葉で、「けれども」「こういった」「こうした」など。柔らかい表現から硬い表現にかわるリストがありますから、そのリストを確認します。

B：先生からのフィードバックで評価がよくなりましたので。…練習の量があがりましたかな。書けば書くほどわかります。フィードバックも大切なことだと思います。

Aは、話しことばと書きことばが難しいと感じており、その自信のなさから、日本語の授業で使用したテキストの一覧表を常に引くことで、徐々に覚えていき、それが自信および、能力向上につながったと考えられる。

Bは、実際に先生からのフィードバックで褒められたことにより、実感しているようである。

以上のことから、レジュメの作成スキルも伸びる要因として、以下の4点がわかった。

- ・構成や流れ、文体に関する授業
- ・回数
- ・実際に書いたレジュメに対するフィードバックや教師からの評価
- ・その結果として、自信もつき、スキルもさらに伸びていく

#### 4-4 レジュメ作成の際に役立った授業について

4-3で、授業内でレジュメ作成に必要な日本語表現や方法を知識として学んでいること、また、何回もレジュメを作成する機会があったことが留学生にとって非常に大切であることがわかった。

では、本学におけるどのような授業が具体的に役立っているのかを見ておきたい。アンケートで「恵泉の授業で、レジュメ作成のときに役立っている授業は、どのような授業だと思いますか。」という設問に対し、表3の回答を得た。

表3 本学の授業でレジュメを作成の際に役立っていると感じた授業

A	日本語能力
B	教養基礎演習 <sup>5</sup> （ゼミ）
C	日本語能力

また、インタビューでは、アンケートの回答のときには出てこなかった留学生の日本語授業を担当している教師名やその授業で使用している教科書の話も出てきた。そこから、留学生は、日本語能力の授業と留学生の日本語の授業とを混同していることも伺え、アンケートとインタビューの結果を総合して考察すると、以下の①～③の各授業が役立ったことが分かった。

3名の学生が全員挙げたのは、次の通りである。

- ① 日本語能力
- ② 留学生のみの作文授業
- ③ ゼミ（教養基礎演習）

以下、各授業の内容と学生からのインタビューの回答を挙げる。

「日本語能力」の授業は日本語ネイティブの学生も受ける必修の初年次教

育で、レポート作成の知識を学んだ後、実際にレポート作成を行い、それをレジюмеにまとめて発表する授業である。作成途中で、教師からのフィードバックを得る機会もある。Cは日本語能力での授業について、以下のように述べていた。

C：初めてレジюмеについてのいろんな説明があるし、助かりました。  
中国語で聞いたことはない。初めて、日本の大学にはいって、初めてレジюмеを作った。名詞で終わることなども。

「留学生のみの作文授業」は、私費留学生と協定留学生のみが必修として履修する授業である。そこでは、書き言葉専用のことばや、句読点の打ち方、わかりやすい日本語の書き方などを学ぶ。実際にはレポート作成はしない<sup>6</sup>が、知識について学び、400字程度の課題文作成は実施している。

「ゼミ」は1年次～4年次まで履修する必修の授業である。1～2年次は半期ごとにクラスと教師が変わり、いろいろな分野で研究することの基礎を身に着け、3～4年次は卒業論文執筆に向け、同一クラスで学ぶ。各クラスでは、共通の課題があり、それは発表とレポート執筆である。そのため、最低でも半期に1度はレジюмеを作成し、レポートを執筆する機会がある。

「留学生のみの作文授業」と「ゼミ」について、

B：最初は全くわからなかった。1年生のころはレジюмеの書き方はめっちゃでした。日本語の授業で、アカデミック日本語を使っていた。そのテキストが役立つと思う。レジюмеとレポートの書き方が詳細に載っていました。ゼミの授業も大変助かりましたと思いまして。実際の練習チャンスもあって、他の学生の発表も参考になれると思って。

T<sup>7</sup>：実際の練習のチャンスとは？

B：先生からのフィードバックがあって。一番印象深かったのは、レジюмеのアウトラインと参考文献を注意された。

T：アウトラインとは？

B：研究背景は一言でわかるように書いてくださいと言われました。続きは調査方法、どういう調査方法を作りたいですか、流れを教えてくださいました。

また、Aは、

A：日本語能力の授業がありますので、忘れないところ青いの教科書

を開いて、参考文献の書き方とか、ことばが、でもレポートのことばをわからないとき、その本を見ます。

T：例えばどんなことば？

A：1年生の留学生のことばでレポートの言葉のリストがあります。その言葉で、「けれども」「こういった」「こうした」など。柔らかい表現から硬い表現にかわるリストがありますから、そのリストを確認します。日本語の授業の本も見ます。

と述べている。

実際にレジюмеやレポートの書きことばがわからないときは、以前受けた授業の本を参考にしていることもわかる。

以上のことから、

- ・日本語能力／留学生のみの作文授業／ゼミ（教養基礎演習）がレジюме作成に役立ったこと、
- ・授業後も書きことばのリストや参考文献の書き方を参照していることがわかった。

#### 4-5 留学生が必要とするレジюме作成の際の支援について

アンケートでは、留学生にレジюме作成の際にどのようなサポートがあるかと思うかについても聞いたところ、以下の回答を得た。

A：言葉の表現や使い方に関する具体的な例を示してほしいです。また、レジюмеの基本的な構成についても詳しく教えてもらえると助かります。さらに、実際に書いたレジюмеに対するフィードバックを受けられると、改善点が明確になり、より効果的に作成できると思います。

B：レジюмеの範文があればいいと思います。

C：明確な構成の例と簡潔な日本語表現があればいいと思います。

4-4で役立った授業で挙げられていた点と重なる点が多いのだが、さらに具体的な例やフィードバック、見本が必要であることがわかる。

#### 5. 留学生のレジюме作成支援の在り方について

最後に、以上のアンケートおよび、インタビュー結果から、本学でどのような支援が可能なかを考えたい。

現状の授業でも本学の留学生のレジメ能力が十分伸びていることがわかるが、さらに充実した内容にするためには、以下の提案をしたい。

一つ目に、レジメの見本集の作成である。ゼミなどでも他者のレジメを見る機会があるかと思うが、改善したほうがいい例を掲載し、具体的な改善案を提示したのち、改善したよい見本を掲載したレジメの見本集を作成し、いつでも学生が参照できるようにしたらどうだろうか。

二つ目に、日本語表現が出てこないときには、現在は翻訳機や Google ドキュメントのチェック機能の使用をしているが、それ以外にもせっかく日本に留学生しているのだから、やはりネイティブに聞いてみる仕組みを活用できるようにしたい。

現在でも本学にはラーニングコモンズなどがあるが、知らない教員に見てもらうのは恥ずかしいということだったため、「恥ずかしくなく」日本語をチェックができるような仕組みを考えていく必要があると考えられる。そこで、インタビューの中で、

C：1年生のゼミで発表する前にペアの日本人が文法を直してくれた。  
めっちゃ助かった。

という話があったことに注目したい。2人で一つのことを調べ、レポートやレジメを作成し、その際に日本語を確認し合いながら、自然な日本語表現を学んでいく方法も有効ではないかと考える。

また、現在は活動休止中だが、学生有志で留学生の日本語の質問を受け付けるサークルもある。

B：2年生のときに留学生の国際室にいて、〇〇<sup>8</sup>の学生にお願いしてみました。そちらの学生はレジメの書き方はわかりませんが、日本語の指摘はしてくれました。一度だけYさんに頼んでみました。あとは会えなくなりましたので。

このように、教師であると「恥ずかしい」という気持ちが強くなるようだが、学生同士であれば、情意フィルターが下がり、聞きやすくなる一方、学生であるがゆえに、レジメ自体の書き方についてはアドバイスができない点もあるため、学生同士でのレジメ作成と授業での教師からのフィードバックとの併用をする授業展開が望ましいのではないだろうか。

3つ目としては、現在実施されているラーニングコモンズの周知方法の再考である。筆者もラーニングコモンズの担当日があることを話したが、学生

はみんな「知らない！」と言われたためである。留学生の日本語の授業やゼミで教員が学生に周知するなど、もう少し積極的に周知することで使用する可能性が出てくるかもしれない。

以上のことから、その打開策として「日本人学生との交流を通して学べる可能性」があることから、学生同士のレジюме作成および、そのレジюмеに対する教師からのフィードバックを授業でできるような仕組みづくりを提案したい。

## 6. おわりに

本論文では、留学生の1年次から3年次のレジюмеを考察し、レジюме能力の変化と課題について論じた。

その結果、構成や流れ、文体については学年が上がるにつれそれらの能力が向上していていることがわかったが、本文と意見の書き分けについては未だ課題として残っていることがわかった。

また、その能力が向上する要因として、アンケートやインタビューの結果から、リテラシー教育、回数やフィードバック、そこから得られる自信が重要であることも判明した。

そして、レジюме作成の際には翻訳機に頼っており、その理由として、親しい日本人の友人がおらず、あまり親しくない人には日本語チェックを頼むのが難しいこともわかった。

以上の結果から、①レジюмеの見本集の作成、②「日本人学生との交流を通して学べ」、教師がフィードバックする仕組みづくり、③現行のプログラムの周知方法の見直しの3点を提案した。

今回レジюмеを読んでいたところ、日本語の間違いは少数であったが、インタビューの際には、多くの間違いがあり、時折、理解が難しいときもあった。特に、②③の実施により、日本語力も向上し、レジюме作成スキルも向上するのではないかと期待する。

今回の結果は3名の留学生のケーススタディである。また、分野により、まとめ方や参考文献の書き方が異なることもあり、それについてはさらに詳細に検討しなければならないが、それは今後の課題としたい。

謝辞：本研究の調査において、多大なるご協力をいただいた留学生の皆様へ、



心より感謝申し上げます。皆様のご理解とご協力により、貴重なデータを収集し、調査を無事に完了することができました。本研究の成果は、皆様の協力なしには成し得なかったものです。ここに深く感謝の意を表します。

また、本調査には筑波大学日本語・日本事情遠隔教育拠点の TTBJ（筑波日本語テスト集）を使用しました。

This survey was performed using a TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) at the Center for Distance Learning of Japanese and Japanese Issues, University of Tsukuba.

#### 参考文献

- 石川公子（2023）「「ニュース伝達」におけるレジюмеの作成の取り組み—留学生のアカデミック・ジャパニーズ能力育成のために—」『日本福祉大学全学教育センター紀要』第11号 日本福祉大学全学教育センター pp.45-57
- 比佐篤（2015）「大学でのリテラシー教育におけるレジюме作成の指導法」『関西大学高等教育研究』第6巻関西大学教育開発支援センター pp.69-80

#### Endnotes

- 1 本学では私費留学生と協定留学生が同一の授業を受けているが、本稿では、私費留学生に焦点を当てているため、ここでいう留学生とは私費留学生を指す。
- 2 つくば日本語テスト集（TTBJ：Tsukuba Test Battery of Japanese）は、筑波大学 CEGLOC で作成し改良を重ねてきたプレースメントテストをインターネット上で受験可能にしたものである。
- 3 アンケートやインタビュー結果の日本語表現は留学生の回答のママである。また、下線部は重要箇所に筆者が付した。
- 4 本学には学生食堂の片隅に「ラーニングコモンズ」を設けている。教師は当番制で、授業時間や休み時間に1名おり、ここに学生がくれば、気軽に質問や相談などができるようになっている。
- 5 アンケートでは、「教養基礎演習」と答えているのだが、その後インタビューをしたところ、ゼミ全般が役立っていることがわかったため、以下、ゼミと記す。
- 6 レポート作成まで実施していた時期もあるが、履修している留学生より「日本語

能力」と同じであり、他の授業でもレポート執筆があるため、負担を少なくしてほしいとの申し出もあり、現在はレポートを執筆する課題までは課していない。

7 T：筆者のことである。

8 ○○＝学部名 ここでは個人が特定されないように、○○とした。